

観光フォーラム

ヨーロッパの「カタコンベ」など —死者の扱われ方：東は東、西は西—

Catacomb and grave in Europe

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

I. ヨーロッパのカタコンベの概要

カタコンベ (catacomb) は、地下の墓所のことであるが、多くの場合には、単なる墓所というよりは、人間の遺骨がそのままの形で、つまりむきだしのまま、多数集められて、整然と並べてあったり、無造作に積み上げてあったり、あるいは何かの模様や場面を描くよう陳列されて、それが公開されている所である。(ただし以下は、本稿筆者が1992年約6か月間調査研究のために西欧に滞在した際の実情やデータに基づくものを含んでいる。現在の状況についてはインターネット等で確認されたい)

亡くなった人たちの遺骨、すなわち骸骨を、とにかくむきだしのまま置いて、人の目にさらすということは、日本では全くないといっていいほど見られないものであるから、ヨーロッパなどでこうしたものを見ると、まず、びっくりするというよりは、“なんということだ”、“全くたまげたことだ”という思いを持つ。

考えてみると(宗教学的にはどのように説明されるかは別にして)、日本では亡くなった人が、骸骨で“この世”に現われ、あるいは存在して、“この世”の人がそれを直接見たり、接したりするということは、まずない。人間の遺骨すなわち骸骨は、どのようなものであれ、日本では見ることも恐ろしい忌避すべきものとなっている。日本でも亡くなった人が幽霊として出るという話はある。しかし幽霊は、原則として肉体的に人間の形をしており、時には衣服も付けている。つまり生きている人間とくらべて、足がないだけ(といわれて)おり、外見上はなんら変わらない。骨だけで、すなわち骸骨だけで出てくるようなものではない、とされている。

浮世絵などでは骸骨が妖怪として描かれているものがあるといわれるが(文献K)、それは、一般的には妖怪としてであって、特定の人間の遺骨という場合はほとんどない。通常の観念でいえば、そのように特定な者が、もし骸骨で現われるようなことがあれば、生きている遺族や関係者は、それを妖怪として扱い、何かの祟りとして公然と忌避するか、あるいは退治すべきものとなる。

日本で骸骨が公然と示され、抵抗感がないものとなったのは、

多分、明治以降の文明開化で、例えば、骸骨をシンボルマークにした海賊の旗が、漫画等で見かけられるようになってからであると思う。その以前に日本でも海賊らしきものはあった。しかし物の本によると、日本の海賊には骸骨をシンボルマークにしたような旗などはなかった。日本では骸骨は、海賊や山賊でもシンボルマークとなるようなものではなかった。地獄絵図などを見ても、圧倒的多くの場合、亡くなった人は、“あの世”でも、“この世”の人間と同じように肉体があり、時には衣服も着ているものとして描かれている。

これに対しヨーロッパでは、往時から骸骨はとにかく人間のそれを示すものとして登場し、全く忌避されたというものではなかった。しかも時には、生きている人間についても、特に怖いものや恐ろしい者を、(人間の)骸骨として、あるいは骸骨の形の人間として描くことがなされてきた。上記のように海賊の旗が骸骨をシンボルにしてきたことなどは典型例であるが、現に残っている有名な絵画には、こうした趣旨で骸骨が登場しているものがある。その代表例に、有名なピーテル・ブリューゲルの絵、『死の勝利』(マドリッド・プラド美術館所蔵)がある。そこではある集落を襲っている(生きた)略奪兵士たちが骸骨の姿で描かれている。(同様な絵は他にもある)

すなわち、少なくともヨーロッパでは、骸骨は早くからある種の(生きている)人間を示すものとされ、いわば“市民権”を得た存在であった。しかもヨーロッパの人の考え方では、骸骨そのものがすべて「怖いもの・悪いもの」ではなく、そうでないものもある。(生きた)人間にも「怖い・悪い」ものと、そうでないものがあるのと同様である、ということになるのであろう。これに対し日本では、骸骨はこうした“市民権”を得たものではなかった。骸骨だけでは幽霊として現れることもなかった。精々妖怪として出るだけのものであった。

前書きはこれぐらいにして、ヨーロッパのいくつかのカタコンベについてガイド的な説明をしておきたい。『フリー百科事典：ウィキペディア』(文献W: 以下の記述はこれらを参考にしている)によると、ヨーロッパのカタコンベとしてとにかく最も有名なものは、イタリア・

シチリア島・パレルモにあるカプチン派修道会墓所といわれるが、初めての場所として行き易いのは、パリのカタコンベである。

①パリのカタコンベ：パリ市内中心部にあり、地下鉄で簡単に行ける。ここは、昔、地下採石場であった所で、パリ市街の大規模改造事業により市内の墓地が取り壊された際移転されたもので、現在約 600 万人の遺骨が納められているといわれる。それら遺骨がむきだしのまま、しかし整然と積み上げられ、いわば骸骨の壁・列がいくつもできている。参拝者（見学者）は、その中のそれほど広くない通路に沿って、“骸骨の壁”の間を縫うように進む。このカタコンベの入り口には「止まれ！ここは死の帝国である」というフランス語碑文が掲げられている。初めての人は一入では行かない方がいい。内部には一応照明があるが、“死の帝国”にふさわしい明るさである。全部見学し、太陽の光輝く地上に出ると、何かしらほっとした気分になる。

②ウィーン・シュテファン寺院のカタコンベ：シュテファン寺院はウィーンを代表する大寺院で、市の中心にあるからすぐわかる。この寺院の地下がカタコンベになっている。パリのカタコンベは、来訪者が随時に個々に入場できる方式であるが、シュテファン寺院のそれは、寺院の地下にあり、複雑な通路に沿っていくつかの小部屋から成っていることもあって、一定時間にまとめて寺院の人の案内で見学する。寺院礼拝堂 1 階の中央部に地下に降りる階段があり、そこで待っていると、所定の時間（時刻表はそこに掲示されている）に先導案内の人が来る。ここには、1678 年にペストが大流行した際に亡くなった人のうちで、約 2000 体の遺骨が納められているといわれるが、パリのように整然と並べられているのではなく、小部屋ごとに遺骨が無造作に積み上げられているだけのものである。それだけに日本人には、ある意味でパリのそれより鬼気迫るという感じがする。

③ローマの骸骨寺：ローマのバルベリーニ広場の近くにある。骸骨寺は通称で、正式には「サンタマリア・デルラ・コンチェティオーネ（Santa Maria della Concezione）教会」というが、日本人で初めての人は本当にびっくりさせられる。思わず、“亡くなった人の遺骨でこのようなことをしてもいいのか”、とつぶやきたくなる。何しろ遺骨がデザインして飾られ、宗義上由緒ある風景の模様などがすべて遺骨により作られ、部屋一杯に飾りつけ展示されているからである。人物像もある。ここはもともカプチン派修道会の納骨堂で、その風景図などは、亡くなったカプチン派修道士の遺骨で作られているといわれる。ここを見学すると、少なくとも往時には、この修道会では、遺骨をこうした形でこの世に残すことが、修道の 1 つであったのか、と考えさせられる。

④ローマ・アッピア街道のカタコンベ：この地域にはいくつかのカタコンベとよばれるものがあるが、もともとは初期キリスト教徒の地下墓所であった所で、地下に棺を置いた棚のような所がそのまま残っている。現に遺骨がそのままあるものではない。その中で特に知られているのは、「サン・セバステアノー（San

Sebastiano）」と、「サン・カリスト（San Callisto）」のそれである。有名なアッピア街道にはローマ市内から路線バス（但し旧道に平行した新道）が通っており、容易に行って、ローマ時代の昔を偲ぶことができる。

⑤オーストリア・ハルシュタット（Hallstatt）の納骨堂（Beinhaus）：ハルシュタットはオーストリアを代表する溪谷美の名所といわれるが、ここの納骨堂は、NHK のルポ番組で取り上げられたことがある。遺骨（特に頭蓋骨）がむき出しのまま並べられ、それぞれの頭蓋骨には花が描かれたり化粧がなされたりしている。往時には、遺族は訪ねると、遺骨（頭蓋骨）に直面し、手に取って表面をなで、さらに色艶を良くするようにする慣例があったといわれる。なお、ハルシュタットの街は湖の西岸にあるが、鉄道駅は東岸にあり、列車時刻に合わせて渡し船的連絡船が運航されている。また、街の裏山には大きな岩塩鉱がある。見学可能な時には、街の南端部に長いケーブルカーがあるから、それを使って容易に行ける。

カタコンベの話は以上とする。カタコンベ的なものは、ヨーロッパ以外にもある。そうした所は、要するに、「遺骨を骸骨として忌避しない文化」があり、日本などでは「それを忌避する文化」があるものと思われる。日本では通常、死者は戒名を付けられ、“あの世”のものとして、名前の上でも“この世”のものとは区別されたものである。故に死者の遺骨は“あの世”のものとして、“この世”に現れることがない。しかしその一方、死者の魂はそれ相当に畏敬されるべきもので、適時に法要などをしたり、時には、例えばお盆の時などには、“この世”に迎え入れられるものである。しかしそれはあくまでも魂、すなわち霊としてであって、その遺骨が骸骨として“この世”に現われるようなことはない、というのが通常的な日本人の考え方である。

従って日本では、死者は“あの世”で魂をもって存在し続けるとされるものであるから、死者の葬られている場所に対する接し方でも、ヨーロッパなどの仕方をみると違和感をおぼえることがいくつかある。上記のカタコンベは別にして、例えばその 1 つに、ヨーロッパでは死者が葬られている場所の上を、観光客を含めた参詣客が土足で立ったり歩くようになっている所が結構あることが挙げられる。

II. 死者の扱い方

亡くなった人の墓の上に土足で立つことは、ロシア・モスクワのレーニン廟が最たるものといえる。このロシア・ソヴィエト体制の生みの親が葬られている墓の上に、その後の国家指導者たちは土足でたち、メーデーの行進などを見ていたものである。

基本的に同じようなことが他の所でもみられる。例えばロンドンを代表するといえるウェストミンスター寺院に行くと、一般参詣客が通る通路の床に「ここに〇〇眠る」という言葉が彫ってある。こうしてウェストミンスター寺院に葬られることは、イギ

リス人にとって最高の名誉といわれるが、そうした著名人が葬られている上を、一般参詣客が土足で歩くのである。

同じような今1つの例を挙げておく。イタリア・ミラノでは、市の中心にドゥオモ（Duomo：大聖堂）がそびえ立っているが、ここには屋根まで上れるエレベーターがあり、それを使って屋上まで行くと、本堂の屋根の上を歩くことができる。その下では多くの人が熱心に参拝している上を、土足で歩くのである。こうした寺院上部に上られるエレベーターは、ローマ・ヴァチカンのサン・ピエトロ寺院にもあり、観光客でもそれを使って寺院頂塔部（クーポラ：Cupola）に上がることができる。日本でも今後コンクリート製の寺社等ができると、こうしたことが起こるのであろうが、ヨーロッパではこうしたことは人々の信仰心を逆なでしたものという声はないのであろうか。それよりも、そうした所にまで行きたいという人々の願望を優先させているのであろうか。

他方では、ヨーロッパでも、墓の上に人が立てないようにしている所が多くある。例えばシェークスピアの墓は、かれの生まれ故郷、イギリスのストラッドフォード・アポン・エイヴオンにあるが、その棺が安置されているのは、同市南部のホーリー・トリニティ教会礼拝堂の床の上で、棺のある所には立ち入り禁止のロープが張られ、参詣者はロープ越しに参拝する。パリでは市の中心部、アンバリッドにナポレオンの墓があるが、その棺はホール中央に安置されて、手すりに囲まれ、人々は手すり越しに参拝する。

一方、有名人で市営墓地等に葬られている人も多い。ロンドンのハイゲイト墓地（地下鉄で行ける）には、カール・マルクスの墓がある。この墓地は広いから、まず、どこに誰の墓があるかを記した墓地案内を墓地事務所で入手し、大体の場所を見当つけておくことが必要である。マルクスの墓にはかれの大きな上半身像があるから、近くに行けば、すぐわかる。これは、墓地に葬られている例であるが、古くて大きな寺院へ行くと、有名人の棺が通路の脇の棚の上に並べて置かれている所が多い。

遺体の扱われ方という点、近年では、ドイツの女性、ローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg：1871-1919）の場合のことが忘れられない。彼女は世界的に著名なマルクス主義経済学者で、（ロシアの）レーニンと対抗するほどの社会主義革命理論家であり、ドイツ共産党創立者の一人であるが、第一次世界大戦直後のいわゆるドイツ革命の真最中1919年1月15日ベルリンで、盟友カール・リープクネヒト（Karl Liebknecht）らとともに、反革命軍民兵に捕えられ、即日虐殺されて、彼女の遺体は近くの運河に投げ捨てられた。遺体は6か月後ようやく見つけられ、収容されたが、全く身体識別不能な状態にあった。一旦葬られたといわれる墓も、ナチス時代にナチス政権関係者により暴かれ、遺体は所在不明となった。

その墓はベルリンのフリードリッヒスフェルデ（Friedrichsfelde）という名のかなり大きな墓地にあるものであるが、本稿筆者の

手許にある1974年の資料によると、「この墓地におけるローザ・ルクセンブルクの墓は、現時点では依然として“空の棺（leerer Sarg）のままである」と書かれている（II,p.55）。そうしたところ日本でも、2009（平成21）年6月3日に（例えば『東京新聞』夕刊等で）『独の女性革命家、ローザ・ルクセンブルク、90年ぶりに遺体発見か』という報道がなされた（文献12）。これは、その後どのような経緯になったのか。残念ながら本稿筆者は寡聞にして知らない。ローザ・ルクセンブルクの冥福を祈るばかりである。

III. 地獄絵図

また、ヨーロッパでも地獄絵図というものがある。死んでも安らかに往生できない人がいろいろな形で懲らしめられている。日本の地獄絵図に実によく似たものである。

こうした地獄絵図でよく知られたものは、斜塔で有名なイタリア・ピサのドゥオモの納骨堂の壁に描かれているものである。このドゥオモにはピサの駅から路線バスがあるから、容易に行ける。このドゥオモは周囲の芝面が実に広く、美しい構内（ドゥオモ広場）となっており、芝と本堂・斜塔等が美しいコントラストを成している。ヨーロッパの教会は他の建物と隣接しているものが多く、このピサのドゥオモのように構内がすっきりした美しさのものはほとんどない。また、このドゥオモ本堂は、ガリレオ・ガリレイが「振り子の原理」を発見する契機となった吊り下がりのランプがあることでも有名である。納骨堂は本堂のすぐ横にある。

しかし地獄絵図としてはもっと鮮明なものが、本稿筆者の知るところ、南フランス・アルビにあるセント・セシル大聖堂（Albi-Cathedrale -Sainte-Cecile）にある。この大聖堂は、それ自体が大きく人々を圧倒するものであるが、その礼拝堂の壁画面に地獄絵図が克明に描かれている。これらの地獄絵図で特徴的なことは、人間の死者が肉体を持ち、日本の地獄絵図で通常描かれているのとはほとんど同じ姿で書かれていることである。なお、アルビは、有名な画家であるロートレックの出身地である。

地獄絵図というと、ローマ・ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂にある、ミケランジェロの周知の大作『最後の審判』も、地獄に関係している。この絵の左右には地獄から救い出される人と、地獄に落ちて行く人が描かれ、画面の最下部には地獄の入り口であるステュクス川、いわゆる「三途の川」が書かれている。

ミケランジェロの『最後の審判』に似た絵、少なくとも同じようなテーマや構図のものは、他の教会にもいくつかある。ちなみに、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画『最後の晩餐』は、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会にあるが、同テーマについての他の作者の絵が、他の都市の教会にもある。同一テーマの絵を他の作者も描いていることは、よくあることである。

しかし、システィーナ礼拝堂にあるミケランジェロのこの絵ほ

ど、人々に感動を与え、人々に生きる力を与えるものはない。この絵が描かれているシステーナ礼拝堂では、部屋に入るとたんに、ほとんどの人は金縛りにあったように、この絵を見入って動かない。というよりは、礼拝堂の天井はじめ部屋一杯に展開されているこの絵に圧倒されて動けない。人々にこうした圧倒的な感動性、生きる勇気を与えるものは、例えば音楽では、ベートーヴェンの交響楽第九番『合唱』しかないと思う。

ミケランジェロのこの絵を見ていると、カタコンベも、本来は、こうした境地を目指したものではないか、という思いが起きてくる。いずれにしろ、死者との接し方は地方・地域により多様であることを思い知らされる。東は東、西は西、である。

IV. 終りに

本稿は、亡くなった人々の遺骨が、どのように扱われているかについて、ヨーロッパ的な特徴を記したものである。ただし冒頭でお断りしているように、宗教的な意義解明を目指したものでは毛頭ない。ただ、パリのカタコンベなどを見学すると、日本人では、そこには亡くなった人々の魂が留まっているものと考えざるをえない。本稿筆者の言わんとするところは、カタコンベにしろ、寺院の床に埋葬されている人の場合にしろ、そこには亡くなった人の魂がある。そうした所で粗略な行動をすることは、観光客としても厳に慎むべきである、ということである。

【参考文献】

- 11: Institut für Denkmalpflege in der DDR (Hsrg.) (1974), *Gedenkstätten*, Leipzig, Urania-Verlag.
- 12: Internet Zone::Wordpress で Blog 生活 「ローザ・ルクセンブルクの遺体、90 年ぶりに発見?」, retrieved on September 18, 2016, from: <http://ratio.sakura.ne.jp/archives/2009/06/03213532/>.
- K: カラパイア「浮世絵・日本画に描かれた骸骨」, retrieved on April 1, 2016, from: <http://karapaia.livedoor.biz/archives/52164713.html>
- W: 「Skeleton」, 「Catacombs」, 「Catacombs of Paris」, retrieved on January 10, 2016, from: Wikipedia; the Free Encyclopedia.